

3 曳縄漁業

本県の曳縄漁業は、これまで一本釣、底延縄等の漁業者が時期的に兼業として操業するものが多く、曳縄漁業の盛んな宮古地方、中でも伊良部町漁協の所属船では、1～3トンの階層は主として沿岸～沖合にかけての漁業で5～10トン階層はカツオ竿釣の裏作としてスマを対象として尖閣諸島海域を漁場として来た。他の沖縄本島、八重山地方では規模も小さく、1トン未満の動力付サバニや2トン未満の和船型で沿岸域を漁場として操業しているにすぎなかった。

昭和57年9月頃宮古地方を中心に浮魚礁（パヤオ）が水深1,000m前後に設置されてからカツオ・マグロ等の蝸集効果が短期間に発揮され漁獲量が著しく増大した。また漁場も2時間以内で到着できる距離で、漁獲も確実性が高いこと等その経済効果の増大は他の地域にも波及し、漁具漁法の工夫や鮮度保持の関心が高まり漁業経営体も増加した。本県の曳縄漁業の対象魚種はカツオ・マグロ・カジキ・サワラ等表層、回遊魚が主体であるが、漁具漁法の工夫で底層にいる白イカ（あおりいか）も、底魚であるアカジンも曳縄の対象として相当漁獲されている。このように曳縄は最近漁具資材が入手しやすく、すぐ使える状態になって販売され、その気であれば誰でも操業出来る状況にあるとはいえ、漁業者はそれ相当に漁具に工夫をこらし、自作もし漁法でも漁獲向上等を図っている。いずれにしてもパヤオの出現、その集魚効果は従来の操業形態のみならず、漁村の漁業形態にも影響を及ぼし、相当変化して来ており、専門的曳縄漁業者が輩出している。

(1) カジキ曳縄……………与那国町漁業協同組合

与那国のカジキ漁は古くは突棒漁業で盛んであった。戦後の最盛期には突棒船は6～7トン級に焼玉エンジン18～20馬力を備え、23隻ほど操業していた。これら漁船は1隻に7～8名の乗組員で構成され尖閣諸島から台湾東海域まで出漁していた。しかし、昭和47年頃を境にこの漁業は消滅した。これまで1トン未満のサバニが主体であったカジキ曳縄釣りが発展し、漁船も和船型（FRP）へと大型化され“与那国のカジキ曳”として定着して来ている。なおこの漁法はFRP2トンの漁船に1人乗って深海一本釣漁業と兼業する漁業者の紹介である。

A 漁 具

漁具の構成は図1-1のように道糸、道糸、サルカン、道糸、釣元、釣針の構成

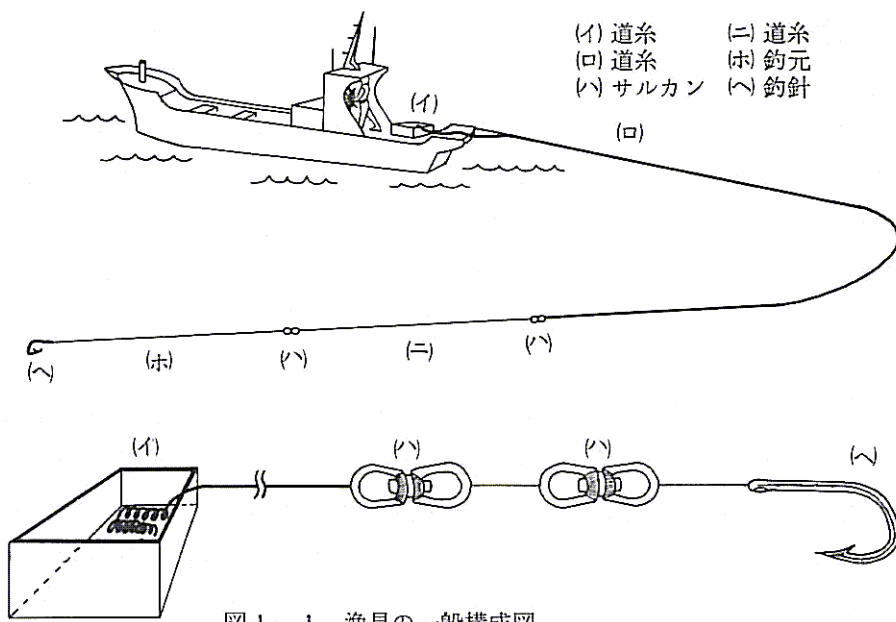


図1-1 漁具の一般構成図

で、道糸にはスーパート印の120～150号、及びナイロンテグス150～180号、釣元には29番鋼線、釣針にカジキ用、40～50号を使う。

- (イ) 一般構成図 (図1-1)
- (ロ) 装餌方法 (図1-2)
- (ハ) 漁具の仕様 (表1-1)

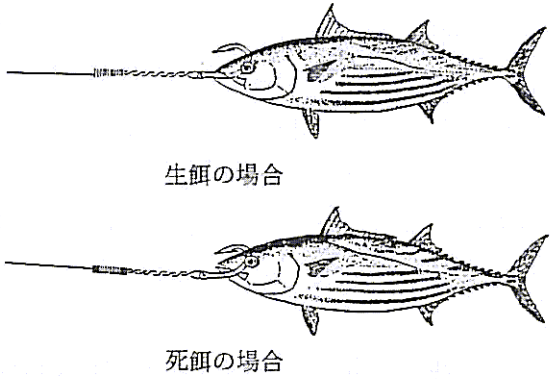


図1-2 装餌方法

表1-1 漁具の仕様

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	道糸	テトロン・ナイロン混	120～150号	1	元繩 スーパート印
ロ	道糸	"	300～500 m	1	
ハ	サルカン	真ちゅう	40～50 m	2	双葉サルカンL(大)
ニ	道糸	ナイロンテグス	150～180号 100 m	1	
ホ	釣元	鋼線	#29 3+9 5 m	1	
ヘ	釣針	鋼	一本針 4寸～5寸 (40～50号)	1	小松大太郎針

B 漁 法

(イ) 操業方法

午前5時頃出漁し、餌料としてカツオ、シビを曳縄で漁獲する、普通生餌を使うが死餌も使用する。餌のつけかたは生餌を使う場合は釣針を口から上顎に通し両眼孔から細いワイヤーを通して釣針と結着し脱離させないようにする、死餌を使う場合は釣針を下顎から上顎まで通す。漁場に到着すると船速を約1ノットで曳縄し、道糸を軽く握ってあたりを待つ。魚が喰い付くと船内の道糸を1カセ(50m)程海中にほうり込み、餌を十分に飲み込ませてから、船速をゆるめる。魚が急激に引っ張り出したら取り込みにかかる。魚が弱ったところを見計って減速して、停船し、魚を引き寄せて“モリ”を打ち込み、船内に取り入れるか、または魚体が大きいと漁港まで曳航する、漁場が近いので魚を釣獲すると帰港し陽のあるうちは再び出漁する。1日に2～3本も釣獲する場合がある。

魚は大潮時に表層を遊泳する。午前8時頃と午後4時頃のほうが釣獲率は高い、カジキの喰い付きのよい餌料は、生餌はシビのほうがカツオより早く、また死餌はカツオのほうがシビより喰い付きは早い、漁船は2トンのFRP船で乗組員は1人である。

(ロ) 漁期、漁場及び漁獲物

漁期は2月中旬から9月頃まで、従来は旧暦の3月3日(4月上旬)の浜下りを境に出漁していたが、浮魚礁(通称パヤオ)が設置されてからは2月中旬から出漁するようになった。

カジキはフィリピン沖から台湾の東興、スオー曾根を遊泳して約1週間したら与那国島に近い西の曾根、ウマ曾根、台湾曾根と回遊したのがこれまでのパターンといわれ、漁場も島に近い曾根で操業していたが、最近では島の西側に設置された浮魚礁周辺が主漁場となっている。漁獲物はクロカワカジキを主体にシロカワカジキ、マカジキなどである。

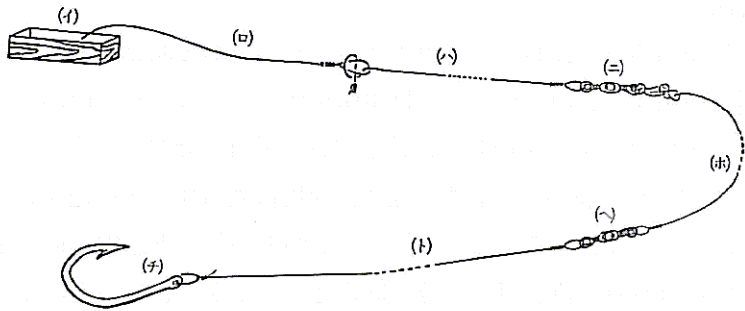
(2) カジキ曳縄…………… 八重山漁業協同組合

カジキ曳縄は、八重山漁協所属船では20隻程度操業しているが、殆んど深海1本釣との兼業で、ここで紹介するのも同兼業者のものである。

A 漁 具

(イ) 一般構成図(図1-1)

(ロ) 漁具の仕様(表1-1)



(イ) 罎箱, (ロ) 元罎, (ハ) 道糸①, (ニ) サルカン, (チ) 道糸②, (ト) サルカン, (ト) 釣元, (チ) 釣針

図 1-1 漁具の一般構成図

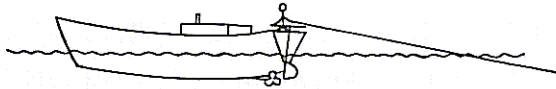


図 1-2 操業見取図

B 漁具の仕立て

大型の魚を対象とするので、漁具もそれに応じて仕立てられており、図 1-1 に示すように各部の連結部はサルカンと“片ツボ”によって連結され、脱落のないように堅固に結着されている。釣針は殆んど市販されているものを使用している。釣元は、ナイロンテグス（ニュークロ）70～150号を使用しており、道糸との連結は、曳航時の回転によるねじれを防ぐためサルカンを使用し、サルカンに抜き通してから“ツボ”を作っている。道糸の“ツボ”は、12本合わせのナイロン糸で巻いて結ぶ。一方はクラブヒッチと二重蛙又結節でもって二重に結着する。

C 漁 船

サワラ曳縄と同じ型の“サバニ”を使い、近年は、乗組員は1人である。

D 漁 法

(イ) 餌料の種類と使用方法

餌料には体重1kg前後のカツオを使用する。

装餌法は図 1-3 に示すように生餌の場合は釣針を口から上顎に通し、死餌の場合は釣針を下顎から上顎まで通す。

(ロ) 操業方法

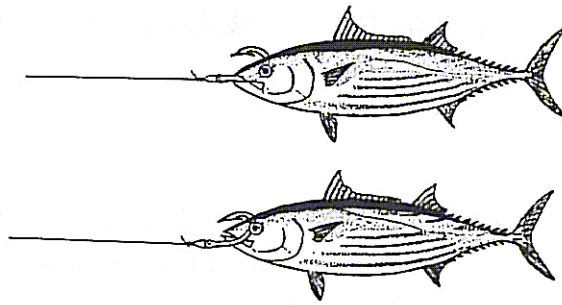


図 1-3 装餌法

道糸①のサルカン部を手で軽く持ち、船速約1ノットで曳航する。この時、船上の道糸①及び元縄（放出縄）はもつれのないように整備しておく、魚が喰い付いたら道糸①を海中に放り込み同時に船速をおとす。そして、魚が餌を

十分に飲みこみ縄を急激に引っ張り出したら取り込みにかかる。魚を舷まで引き寄せると、あらかじめ用意してあるモリで突く。

E 漁期、漁場及び漁獲物

漁期は3月から7月までで、盛漁期は5～6月である。

主漁場は石垣島の白保沖合である。最近は浮魚礁（バヤオ）1 Km周辺での操業が主である。漁獲物はクロカワカジキ、マカジキ主体にシユモクザメ、アオザメなどである。

表 1-1 漁具の仕様

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	縄箱	杉、松	70 cm × 40 cm × 30 cm	1	
ロ	道糸	テトロン・ナイロン混	6 mm 600 m	1	元縄、スーパートト印
ハ	道糸①	テトロン	150本合せ 40 m	1	
ニ	サルカン	真ちゅう	長さ 8.2 cm	1	
ホ	道糸②	テトロン・ナイロン混	150号 100 m	1	スーパートト印
ヘ	サルカン	真ちゅう	長さ 5.2 cm	1	
ト	釣元	ナイロンテグス	70～150号	1	ニュークロ印
チ	釣針	鋼	1本針 40号	1	

(3) カツオ・スマ曳縄……………伊良部町漁業協同組合

小型船による浮魚礁（通称バヤオ）利用及び尖閣諸島でのヒコーキ、擬餌素曳によって表層の魚を漁獲するもので曳縄は2～4本使用する。なお、バヤオの集魚効果に

より、次第にバヤオ利用率が高くなり、尖閣諸島でのスマ曳縄の機会が少なくなりつつある。

A 漁 具

船尾から出す2本の曳縄の長さは同じで、道糸にクレモナを22m、ヒコーキをはさんで幹系ナイロンテグス80号に3m間隔にサルカンを3本付けて枝糸を配し、擬餌をそれぞれ4本仕掛ける、張出等から出す2本の曳縄は、道糸のクレモナを12m、道糸・幹系のつなぎをサルカンを付けて枝糸に擬餌を仕掛ける“とったり”からの全長は2本とも21mである。

(イ) 一般構成図 (図1-1)

(ロ) 漁具の仕様 (表1-1)

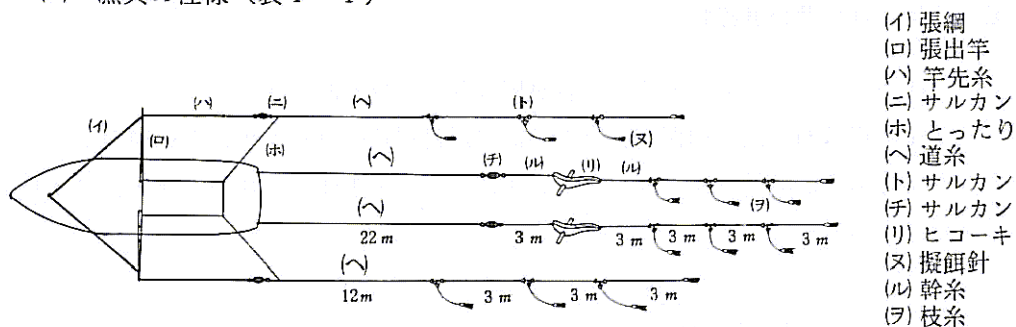


図1-1 漁具の一般構成図

表1-1 漁具の仕様 (4組分)

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	張網	ポリプロピレン (PP)	4 mm 5 m	2	
ロ	張出竿	竹	5 ~ 6 m	2	
ハ	竿先糸	P. P	4 mm 5 m	2	
ニ	サルカン	真ちゆう	タル型 6/0	2	
ホ	とったり	クレモナ	150 本合 4 m	2	
ヘ	道糸	クレモナ	150 本合 12 m 22 m	2 2	
ト	サルカン	真ちゆう	3 × 3 三股サルカン	12	
チ	サルカン	真ちゆう	タル型 6/0	2	
リ	ヒコーキ	木製	約 35 cm	2	
ヌ	擬餌針	ビニールベイト	タコ型 3.5 号	16	カグラ 4 角型 鉛目玉付 2 又針 2 ~ 4 号
ル	幹系	ナイロンテグス	80 号 3 m	16	
ヲ	枝糸	ナイロンテグス	60 号 80 cm	12	

B 漁 法

(イ) 操業方法

操業は、尖閣諸島（主に赤尾嶼周辺）では、日中潮目に沿って潮上で行い、ヒコーキ曳を主体に擬餌素曳も併用する。曳航速度は7～8ノットで、魚が擬餌針の半数近くかかるまで待ってくり込む。浮魚礁（パヤオ）での操業はその周辺航走により行う、なおパヤオ利用においては、流し釣も併用する。漁船は2～5トンに1～4人乗りである。曳縄の数は乗組員1人に対し1～2本程度である。

(ロ) 漁期、漁場及び漁獲物

カツオは主としてパヤオを利用し、スマは尖閣諸島が漁場である。漁期は周年で尖閣諸島のスマ曳縄は11月～5月頃であるが、最近パヤオの常時集魚効果により、尖閣諸島でのスマ曳縄の機会が少なくなりつつある。漁獲物はシマカツオ（すま）、カツオ、シビ等でサーラ（さわら）も釣獲される。魚は氷にする。

(4) カツオ・ソーダカツオ曳縄 …………… 粟国村

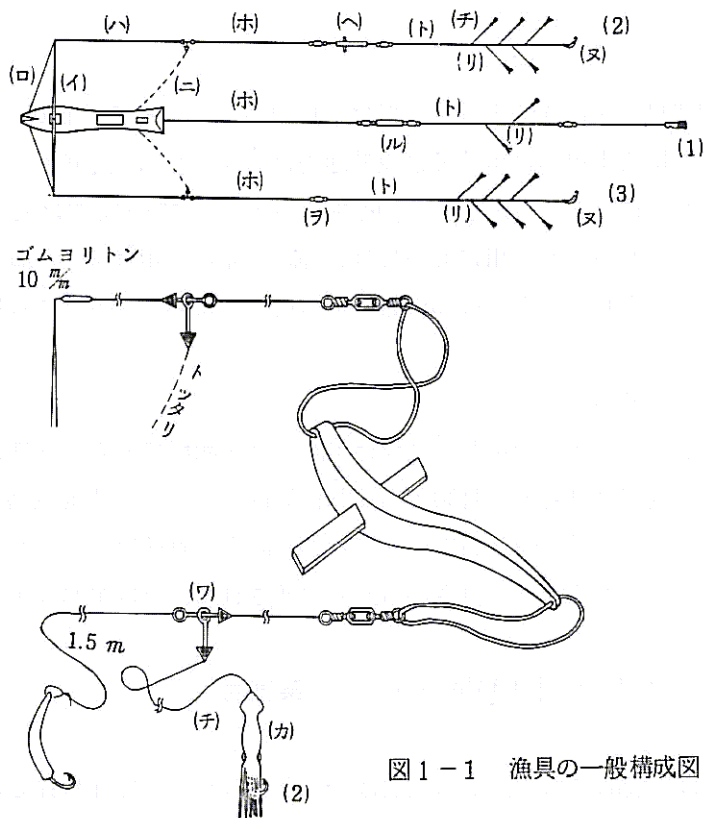
曳縄は粟国地区では一般的である。この漁法は一人乗りのサバニで行われている深海一本釣漁業と兼業しているものの紹介である。

A 漁 具

図1-1のように3本曳で曳航するが、ヒコーキやおもり及び素曳によって潜水の高低を調節している。3本曳では道糸はスーパート80～90号を30～40m伸ばす。船の中央から出した曳縄(1)はおもり（鉛3～4Kg）をはさんで幹糸ナイロンテグス60号を15～20m使い、枝糸3本を配す。擬餌にはタコカイカを使う。なお、この中央の曳縄は水面から深みの魚を目的としたものである。つぎに船の右舷の竿から出した曳縄(2)は、ヒコーキをはさんで幹糸にナイロンテグス60号を15～20m使い、擬餌のタコ及びイカを5本仕掛け、先端に弓角の擬餌を仕掛ける。これは水面付近の魚を目的としたものである。曳縄(3)は道糸の先端にサルカンを付け、サルカンから幹糸ナイロンテグス60号を15～20m伸ばし、幹糸に枝を配して(2)と同じ擬餌6本を付けて、先に弓角の擬餌を仕掛ける。

(イ) 一般構成図（図1-1）

(ロ) 漁具の仕様（表1-1）



- (イ) 張出竿
- (ロ) 張網
- ハ 竿先糸
- ニ とったり
- ホ 道糸
- ヘ ヒコーキ
- ト 幹糸
- チ 枝糸
- リ 幹糸
- ヌ 擬餌
- ル おもり
- ヲ サルカン
- ワ "
- カ 擬餌

図 1-1 漁具の一般構成図

表 1-1 漁具の仕様

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考	
イ	張出竿	竹	6 m	2		
ロ	張網	クレモナ	直径 3~5%	8 m	2	
ハ	竿先糸	テトロン・ナイロン混	80~90号	1.5 m	2	スーパートト印
ニ	とったり	"	"	3 m	2	"
ホ	道糸	"	"	30~40 m	3	"
ヘ	ヒコーキ	木		1		
ト	幹糸	ナイロンテグス	60号	15~20 m	3	
チ	枝糸	ナイロンテグス	40号	80 cm	13	
	"	"	"	1.5 m	2	弓角の枝糸
	"	"	"	3 m	1	イカ、タコの枝糸
リ	幹糸	ナイロンテグス	60号	1.5 m	11	糸
ヌ	擬餌	プラスチック	弓角型 (3号)	2		
ル	おもり	鉛	長型	3~4 kg	1	おもりの両端にサルカンを付ける
ヲ	サルカン	真ちゅう	マグロサルカン	9/0	1	
	"	"	タル型サルカン	3/0	1	
ワ	"	"	親子サルカン	3×4		
カ	擬餌	ビニールベイト	イカ、タコ型、 釣針 24~28号	3号	14	

B 漁 法

(イ) 操業方法

漁場が近いので午前7時頃に出漁し、2～3時間操業で帰港する。漁船は1.5トンのサバニに1人乗りである。

操業時の曳航速力は5～6ノット、魚が喰い付くと速度をおとしゆっくりたぐり寄せて取り込む。

(ロ) 漁期、漁場及び漁獲物

漁期は11月～5月、漁場は水深100～500mの粟国島周辺、曳縄漁業以外はマチ類を対象とした一本釣漁業を行なう。曳縄での漁獲物はカツオ、ソーダカツオ、シビ（キハダの仔）等を水氷で保蔵する。なお粟国地区では冬場の漁獲物はほとんど村内消費用に販売されるが、カツオの盛漁期を迎える4～6月頃はトビウオ漁も盛漁期となるので、漁業組合（座間味漁協粟国支部）自営の鮮魚運搬船でトビウオ、カツオ等をコンテナに水氷で保蔵し、県漁連市場へ出荷する。

(5) カツオ・スマ曳縄……………渡嘉敷漁業協同組合

この漁法は深海一本釣との兼業として操業しているものでサバニに現用されているものである。

A 漁 具

(イ) 一般構成図（図1-1）

(ロ) 擬餌針の仕立て（図1-2）

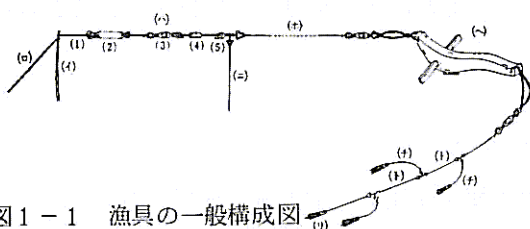


図1-1 漁具の一般構成図

- (イ) 張出竿
- (ロ) 張網
- (ハ) 竿先糸
- (ニ) とったり
- (ホ) 道糸
- (ヘ) ヒコーキ
- (ト) 幹糸
- (チ) 枝糸
- (リ) 擬餌針
- (1) 先糸
- (2) ゴム
- (3) サルカン
- (4) おもり
- (5) サルカン

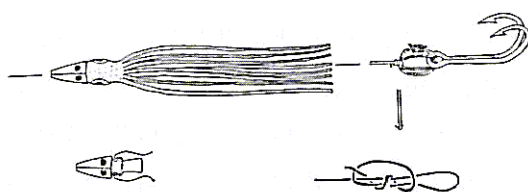
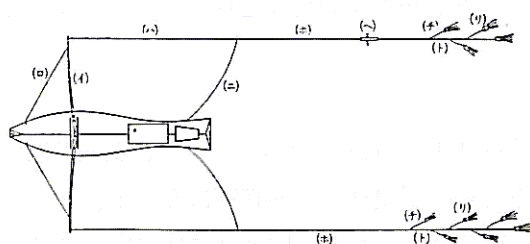


図1-2 擬餌針の仕立て

擬餌は、ビニール製イカ、タコの頭部を1/3程度切り取り、釣針の結び目が頭部から出ないように内側を“カグラ”に結着する。釣針は2本針を使用し、“カグラ”から図1-2のようにナイロンテグスでツボを出し、これに釣針を結止する。

(イ) 操業見取図 (図1-3)



- (イ) 張出竿
- (ロ) 張網
- (ハ) 竿先糸
- (ニ) とったり
- (ホ) 道糸
- (ヘ) ヒコーキ
- (ト) 幹糸
- (チ) 枝糸
- (リ) 擬餌針

図1-3 操業見取図

B 漁具の仕立て

縄類の仕立ては竿先糸は張出竿先端に先糸を結び、これに自転車のチューブを2つに切ったもの、又は市販の2~3mのゴムを結止し、更にサルカンを付け、漁具を安定させるためのおもりを使用する。おもりの両端は、真ちゅうの13番線で“かぎ”を作って道糸などの取りはずしを容易にしている。道糸とおもりとの連結は親子サルカンを使用し“とったり”はこの親子サルカンに結んでおく。各部の連結には、サルカンを入れて撚りを防いでいる。

擬餌素曳きの漁具構成は、ヒコーキの場合とほとんど同じであるが、擬餌が2本多いことだけが異なる点である。

C 漁 船

1トン以下のサバニ、3~4.5馬力に1人乗り組んで操業し、特別の設備はもたない。

D 漁 法

(イ) 餌料の種類と使用方法

ビニール製イカ、タコ擬餌を使用し、羽毛等は使用しない。

(ロ) 操業方法

操業にあたっては、ヒコーキ付きのものと素曳きのものとを2本使用するが漁具は出港後直ちに繰り出して曳航を開始し、全速で漁場に向う。その時、1尾でも漁獲があれば船速をおとしてそれを取り込み、再び、全速で漁獲位置周辺を旋回する。この方法を繰り返す。漁場は港内での情報の交換や他船の操業状況などから判断する。

E 漁期、漁場及び漁獲物

4月の漁期始めに瀬付群のスマが漁獲され5月にはカツオが混獲される。その後11月まで操業されるが、盛漁期は6～7月である。漁場は、ごく沿岸域で瀬付群、接岸回遊群を対象に日帰り操業である。漁獲物は、スマ、カツオ、サワラ、キハダ、シイラ、イソマグロなどである。

表1-1 漁具の仕様（ヒコーキ用一本分）

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	張出竿	孟宗竹	3～4 m	1	
ロ	張網	クレモナ	6号 4～5 m	1	
ハ	竿先糸	クレモナ	6号 5 m	1	
ニ	とったり	ナイロンテグス	60～80号 5 m	1	
ホ	道糸	ナイロンテグス	80号 50 m	1	
ヘ	ヒコーキ	杉	全長 29cm	1	
ト	幹糸	ナイロンテグス	60号 5 m	2	
チ	枝糸	ナイロンテグス	24号 80cm	4	
リ	擬餌針	鋼	2本針 2～4号	4	ビニール製イカ タコ型
1	先糸	クレモナ	6号 0.5～1 m	1	
2	ゴム	ゴム	2～3 m	1	
3	サルカン	真ちゅう	長さ 8 cm	1	
4	おもり	鉛	長さ 9 cm (インチパイプ に鉛を流込む)	1	
5	サルカン	真ちゅう	長さ 2.5×3 cm 親子サルカン	1	

(6) スマ曳縄 那覇市沿岸漁業協同組合

A 漁 具

2本曳で普通の曳縄と変らないが、道糸の長さとおもりで曳航深度を調節している。

同1-1のように船の左舷より出した道糸の長い(1)は、スーパート35～40号を50m伸ばし、ひし型のおもり(320匁)を取り付け、釣元にサルカンをはさんで擬餌を仕掛ける。曳縄の全長は約67mである。なお、おもり320匁は7個の重量である。

船の右舷より出した(2)のものは、スーパートト35~40号を45m伸ばし、ひし型のおもり(290匁)を取り付けて(1)のものより深度を浅くする。なお、擬餌の仕掛けは(1)と同様で、おもりは6個使用する。曳縄の全長は約62mとなる。

擬餌は弓角を使用しているが、市販あるいは自家製である。浮魚礁で操業する場合はおもりを減らし浅く曳く。

(イ) 漁具の一般構成図……(図1-1)

(ロ) 漁具の仕様(表1-1)

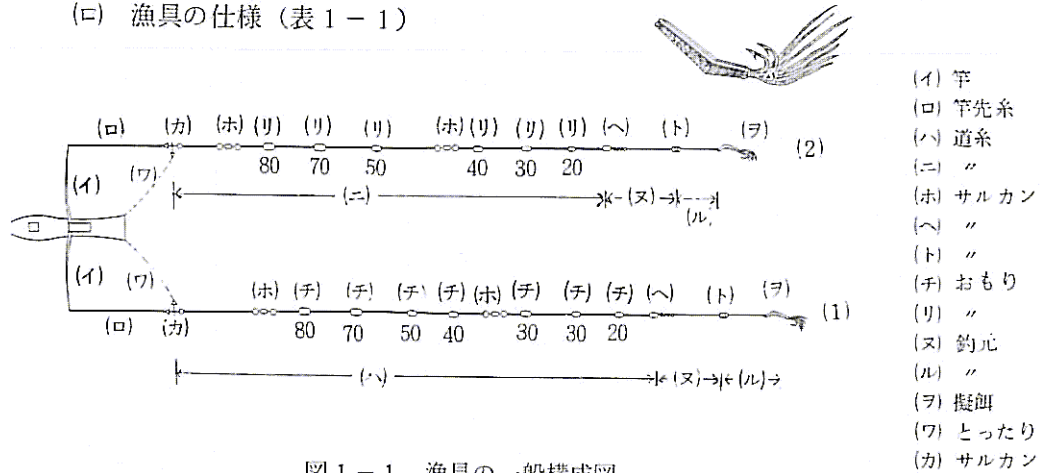


図1-1 漁具の一般構成図

表1-1 漁具の仕様(2本分)

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	竿	竹	4.5m	2	
ロ	竿先系	テトロン・ナイロン混	40号 6m	2	スーパートト印
ハ	道糸	〃 〃	35~40号 50m	1	スーパートト印左舷側
ニ	〃	〃 〃	〃 45m	1	〃 右舷側
ホ	サルカン	真ちゅう	ハコ型 4/0	4	
ヘ	〃	〃	ヘビースクリュー 6%	2	
ト	〃	〃	ヘビースクリュー 6%	2	
チ	おもり	鉛	20・30・30・40・50・70・80	7	重さは 匁
リ	〃	〃	20・30・40・50・70・80	6	〃
ヌ	釣元	ナイロンテグス	40号 15m	2	
ル	〃	〃	30号 1.5m	2	
ヲ	擬餌	プラスチック	弓角 7~10cm	2	
ワ	とったり	テトロン・ナイロン混	35号 6m	2	スーパートト印
カ	サルカン	真ちゅう	親子サルカン 1×2	2	

B 漁 法

(イ) 操業方法

漁法は他の曳縄漁業と同じであるが、漁具の深度は比較的浅く、曳航速力は約5～6ノットで操業する。喰い付きのよい時間帯は明け方から午前10時頃までと午後3時から午後6時頃までである。

ジャーガジラー（すま）は山影で急傾斜の水深10～50mでよく釣れるので漁場は陸地よりである。

擬餌は弓角が主に使用されるが、曇り時は青やねずみ色の黒系統のものがよく、晴天時の朝と夕方は赤に近い光沢の強い色彩の方が喰い付きはよい。

漁船は2トン未満の1人乗りで日帰り操業が一般的である。

(ロ) 漁期、漁場および漁獲物

漁期は4月～10月で漁場は残波岬沖、黒島の北側沖、渡名喜島東沖、神山島沖、ムウ曾根、チービシ沖及び田名灯台沖である。

漁獲物はスマが主体でガーラ（ひらあじ類）や、時々アカジン（すじあら）も釣獲される。

(7) サワラ曳縄……………池間漁業協同組合

A 漁 具

図1-1のように、道糸に鉛のおもりを付けて漁具を沈めるようにしてある。2本の曳縄は同じ長さである。道糸はワイヤー30mを使い、おもりをはさんでワイヤーを15m、サルカンをはさんで枝糸はステンレス20番線を70cm伸ばし、その先に自家製の「シャビキ」を仕掛ける。

(イ) 一般構成図（図1-1）

(ロ) 漁具の仕様（表1-1）

B 漁 法

(イ) 操業方法

早朝出漁し両舷の張出竿に2本の曳縄を連結して漁具を投入する。曳航速力は4～5ノットである。魚が喰い付けば“とったり”を操り寄せて魚を取り込んで再び漁具を投入する。漁船は2トン級の1人乗りの日帰り操業である。

(ロ) 漁期、漁場および漁獲物

漁期は6～10月、漁場はフデ岩、大神島、八重干瀬周辺、漁獲量は多いときは

100 ~ 150 Kg、少ないときは40~50Kgで氷蔵にして翌朝のセリにかける。

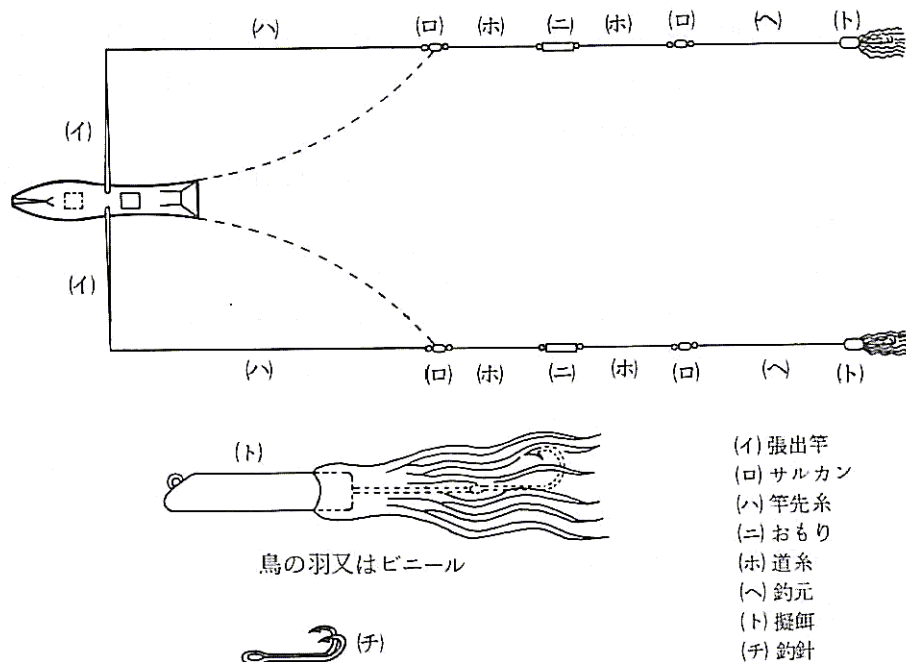


図 1 - 1 漁具の一般構成図及び擬餌針

表 1 - 1 漁具の仕様

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	張出竿	竹	4 ~ 5 m	2	
ロ	サルカン	真ちゅう	タル型 6/0	4	
ハ	竿先糸	クレモナ	4 ~ 5 mm 10~15 m	2	
ニ	おもり	鉛	5 ~ 7 Kg	2	
ホ	道糸	鋼	ワイヤー 31番 1 × 7 30m × 2 15m × 2	4	
ヘ	釣元	ステンレス 針金	#20 70cm	2	
ト	擬餌	鉛 ビニール、羽		2	ビニールベイト
チ	釣針	鋼	2又針 35 ~ 45 号	2	

(8) サワラ曳縄……………八重山漁業協同組合

この漁業は八重山近海では盛んに行なわれており、現在30余隻が深海一本釣、刺網などと兼業している。ここで示す漁法は、曳航用おもり、小鉛潜航板を自作し、深海一本釣漁業と兼業しているものの紹介である。

A 漁 具

a 漁具の構成

- (イ) 一般構成図 (図1-1)
- (ロ) 潜航板、擬餌見取図 (図1-2)
- (ハ) 操業見取図 (図1-3)
- (ニ) 漁具の仕様 (表1-1)

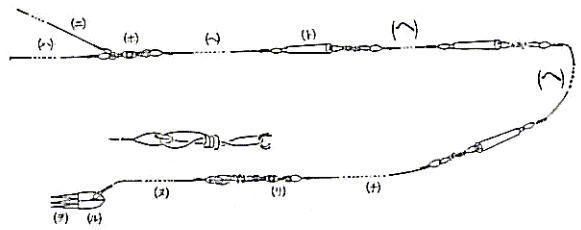


図1-1 漁具の一般構成図

b 漁具の仕立て

連結部は図1-2

に示すように抜き通してから“ツボ”を作る方法で結着する。鉛製の潜航板(俗称チョンチョンミー)は自家製で、長さ5.5cm、幅3cm、重さ86gあり、自船の船速にあわせて横ぶれするように調整する。調整方法は潜航板の上部を削ったりハンマーでたたいて調整を行なうが、この調整が漁獲を左右する重要な点である。

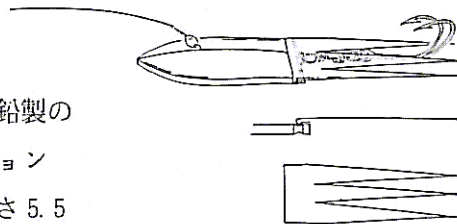


図1-2 潜航板、擬餌見取図

- (イ) 張出竿
- (ロ) 張網
- (ハ) 竿先糸
- (ニ) とつたり
- (ホ) サルカン
- (ヘ) 道糸
- (ト) おもり
- (チ) 幹糸
- (リ) サルカン
- (ヌ) 釣元ワイヤー
- (ル) 潜航板及び擬餌
- (ヲ) 釣針

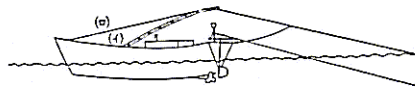


図1-3 操業見取図

縄類の仕立ては、図1-1に示すように竿先糸と道糸との連結にはサルカンを使用し、ここに“とつたり”を結ぶ。道糸にはワイヤーを用い、幹糸との連結部に3m間隔で3個のおもりをとりつけ、幹糸を安定させている。幹糸と釣元はサルカンとステンレス18番線のツボにより連結する。その“ツボ”には釣元の取り替を容易にするための受棒が作られる。

B 漁 法

漁船はサバニの 1.5 トン FRP 船を使い 1 人乗りである。

(イ) 餌料の種類と使用方法

餌料にはグルクン（たかさご）、ガツン（めあじ）、カタカシ（ひめじ）、ムロなどの鮮餌を使用し、釣針の“また”に魚を乗せ、12本合のナイロン糸で結着する。餌料の大きさは体長14 cm内外のものが適当である。またカツオの腹肉を使用する場合もあり、この場合図 1-4 に示すように餌のしぼり方と結び糸の取り付けは $\frac{1}{3}$ の部分に針を通し、先端をナイロン糸で結着する。

最近はまだプラスチック製擬餌も併用する。

(ロ) 操業方法

餌料を装着した釣元を予備として数本餌箱に用意し、漁場に到着すると船速を 5～6 ノットにして曳航し、1 尾でも魚が喰いついたら、船速はそのまま取り込み、予備釣元と取り替え、再び曳航する。

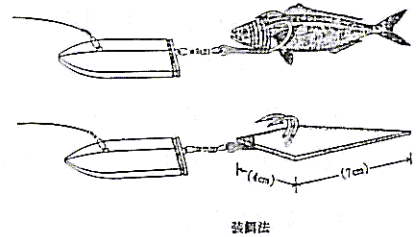


図 1-4 装餌の方法

(ハ) 漁期・漁場及び漁獲物

漁期は 5 月から 9 月までの 5 ヶ月間で 7～8 月が盛期である。漁場は島周辺の水深 60 m 内外の沿岸域と石垣島南域の水深 400～800 m に設置された浮魚礁（パヤオ）である。日帰り操業でサワラ主体にカツオ・シビ等で水蔵にする。

表 1-1 漁具の仕様

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	張出竿	孟宗竹	2～4 m	1	
ロ	張綱	クレモナ	6 号 3～5 m	1	
ハ	竿先糸	〃	5 号 8～10 m	1	
ニ	とつたり	〃	6 号 3～5 m	1	
ホ	サルカン	真ちゅう	8.5 cm	2	ハコ型
ヘ	道糸	鋼	1 号 40～45 m	2	ワイヤー
ト	おもり	鉛	長さ 15 cm 直径 1.5 cm	6	1 本曳に 3 個使用、自家製
チ	幹糸	ナイロンテグス	120 号 8 m	2	
リ	サルカン	真ちゅう	5.7 cm	2	ハコ型
ヌ	釣元 ワイヤー	鋼	0.8 号 6 m	2	
ル	潜航板及 擬餌	鉛	長さ 5.5 cm 幅 3 cm	2	チョンチョンミー
ヲ	釣針	鋼	2 又針 38 号	2	

(9) サワラ曳縄 ……………伊平屋村 漁業協同組合

伊平屋村漁協所属のサワラ曳縄船は約10隻で殆んどサバニである。ここで紹介するのは漁業を専門的に行い、7月～9月はカツオ曳縄、10月～4月はムルー一本釣と白イカ曳縄、5月～7月はサワラ及びシイラを目的に操業している中のサワラ曳縄の紹介である。

A 漁 具

道糸50m（エース 漁紋印 30～50号を使う）の先に、サルカンをはさんで幹糸はナイロン120号を50m伸ばし、おもり付きサルカンをはさんで枝糸はステンレスワイヤー # 32を5m伸ばした先に擬餌を仕掛ける。

(イ) 一般構成図 (図1-1)

(ロ) 漁具の仕様 (表1-1)

B 漁 法

(イ) 操業方法

餌料は、塩ビタコ及び弓角などの擬餌を使用し、擬餌の大きさは、弓角で6.5号から7.5号、塩ビタコは7から8寸のものが使われる。擬餌は何本か用意し漁場に到着すると船速を5～6ノットで曳航し、魚が喰い付いたら、船速はそのまま直ちに手繰り寄せて漁獲し、再び曳航する。漁船はサバニ（2トン未満）乗組員は1人である。

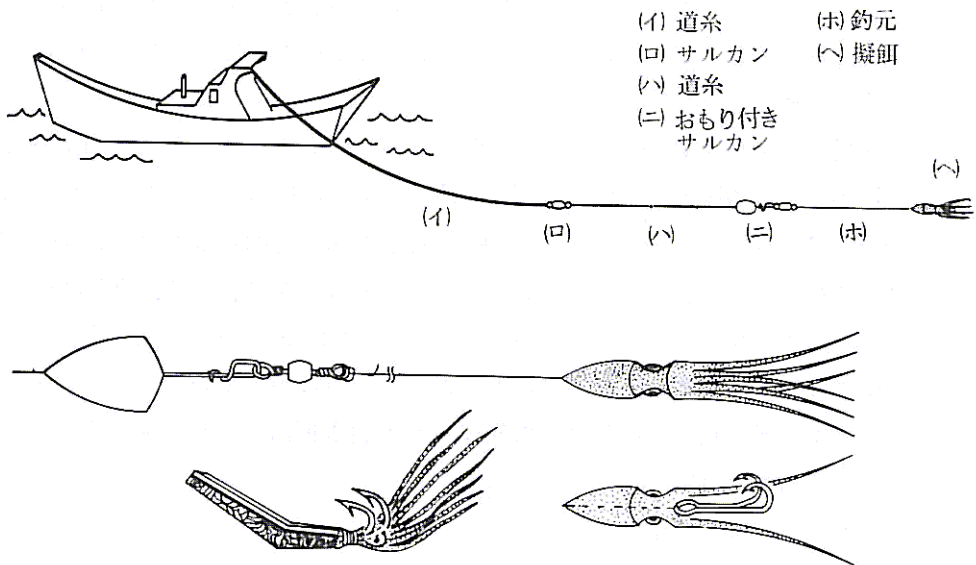


図1-1 漁具の一般構成図

表 1 - 1 漁具の仕様

符号	名称	材 質	規 格 ・ 寸 法	数 量	備 考
イ	道糸	合成化繊	エース漁紋30~50号50 m	1	
ロ	サルカン	真ちゅう	5/0	1	タル型
ハ	道糸	ナイロンテグス	120号、50 m	1	
ニ	おもり付きサルカン	鉛、真ちゅう	おもり 120 匁、タル型サルカン	1	
ホ	釣元	ステンレスワイヤー	# 32 1×(3+9)、5 m	1	
ヘ	擬餌	塩ビ、プラスチック	タコ型、7~8寸 弓角 6.5~7.5号		漁模様によって擬餌を変える

(ロ) 漁期、漁場及び漁獲物

漁期は5月から7月中旬までである。漁場は島周辺の水深60~70 m前後の海域で、明け方に操業が始まり正午頃帰港する。漁獲物はサワラ・シイラが主体で水氷で保蔵する。

また、時期によってはカツオ曳、白イカ曳なども行なう。

(10) ジャンボ曳縄 (マグロ類) ……………伊良部町漁業協同組合

この漁法は、昭和50年頃に九州から導入された漁法である。昭和56年度に宮古地域を中心に浮魚礁 (パヤオ) が設置されるようになり、表層魚の蝟集効果が現われてから一般に普及された。これは3トンのFRP船で現用されているものの紹介である。

A 漁 具

漁具は立竿 (FRP 8 m) の先端に竿先糸ナイロンテグス 180 号を 8 尋伸ばし、サルカンをはさんで切らせ糸とトツタリを連結し、道糸はナイロンテグス 180 号を全長 84 尋伸ばした先に、ジャンボヒコーキ (長さ 60 cm) と称する木製の抵抗体を取り付けて道糸をピーンと張る。ジャンボの前から 30 尋、7 尋、7 尋と幹糸にツボでもって取りはずしが出来る 3 本の枝糸ナイロンテグス 100~120 号の先にそれぞれ擬餌を仕掛ける。擬餌は曳航時に丁度波頭をたたくように各枝糸の長さを調整する。またジャンボの後に枝糸 18 尋伸ばした先にカグラ付き擬餌イカを仕掛ける。

(イ) 一般構成図 (図 1 - 1)

(ロ) 漁具の仕様 (表 1 - 1)

B 漁 法

(イ) 操業方法

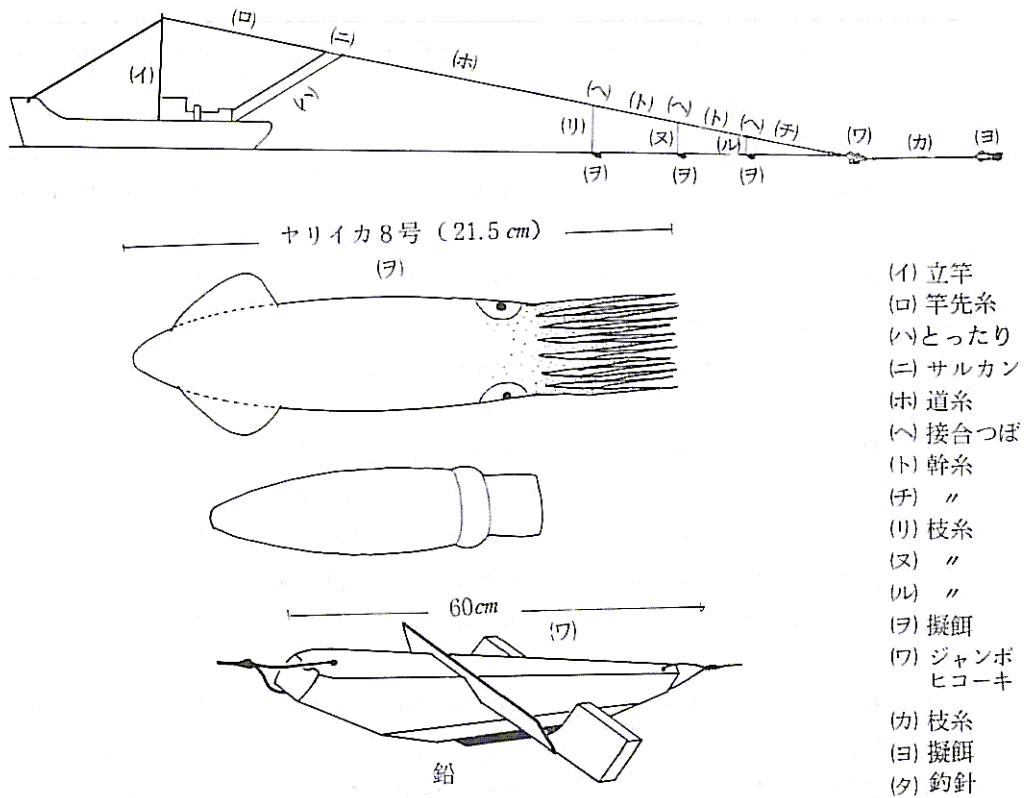
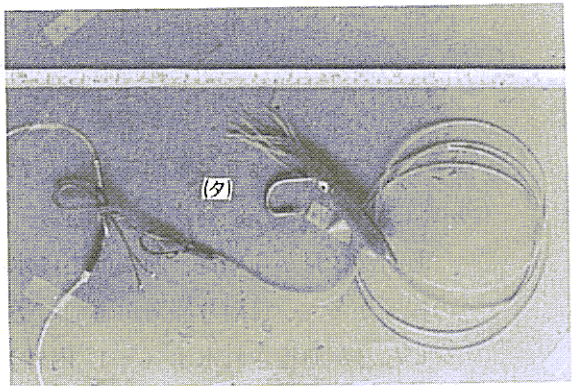


図 1-1 漁具の一般構成図及び釣針

午前 4 時頃出漁し、約 1 時間 30 分で浮魚礁周辺の漁場に到着し明け方から操業が始まる、曳航速度は普通 3 ノットであるがキハダ、メバチが表層で跳ねているときは全速で魚群の前方に接近し 3 ノットで曳航する、魚が喰い付くと船速を減速にし直ちに手繰り寄せて取り込み、再び曳航する、操業上の注意とし



幹糸と枝糸の接合の仕方

て、ジャンボに近い枝糸に魚が喰い付きその前方に喰い付いていないときは、その前方の枝糸の擬餌は舷縁に掛けて他の糸ともつれさせないようにする。特にキハダ (30Kg) が喰い付いたときは注意を要する。また、電動一本釣機を装備して

表 1-1 漁具の仕様

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	立竿	FRP	8 m	1	
ロ	竿先糸	ナイロンテグス	180号 8尋	1	ニュークロ印
ハ	とったり	クレモナ	4号 5尋	1	元縄 300 m
ニ	とばせ	ナイロンテグス	40~60号 30cm	1	
ホ	道糸	ナイロンテグス	180号 40尋	1	ニュークロ印
ヘ	接合つぼ	クレモナ	26号	3	
ト	幹糸	ナイロンテグス	180号 7尋	2	
チ	〃	〃	30尋		
リ	枝糸	〃	100~120号 2尋	1	
ヌ	〃	〃	〃 1.75尋	1	
ル	〃	〃	〃 1.5尋	1	
ヲ	擬餌	塩化ビニール	ヤリイカ 8号 (21.5 cm)	3	
ワ	ジャンボ ヒコーキ	木	60 cm × 30 cm × 15 cm	1	
カ	枝糸	ナイロンテグス	100~120号 18尋	1	ニュークロ印
ヨ	擬餌		4号~5号	1	ルアー
タ	釣針	鋼	角型 48号~53号	4	啓作

いる船は、魚が喰い付くと船速はそのまま直ちに一本釣機で巻きあげながら喰い付いていない枝糸を取りはずし喰い付いた魚を取り込む。

この漁法は魚が表層に遊泳している場合、または表層を跳ねているときなどは釣獲率は高い。また、魚が表層より深く遊泳しているときは喰い付きは良くないので、こういうときは生餌を使用した1尾かけによる流し釣りで操業する。

(ロ) 漁期、漁場及び漁獲物

漁期は3月から10月、漁場は主に水深1,000 m前後に設置された浮魚礁周辺での操業が多く、日帰り操業が普通である。漁獲物はキハダ、メバチ主体にカツオシビなどが漁獲され水氷(-1°内外)で保蔵する。

(11) ジャンボ曳縄 (マグロ類) ……………糸満漁業協同組合

この地域は、これまで底延縄、立延縄などの底魚釣漁業が盛んであったが、最近マチ類の漁獲量が減少傾向に見られることから、操業の長期安定化を図るために昭和49年12月

に沖合に浮魚礁が4基設置されるようになって、この漁法が普及した。なおここで示す漁法は一般的に使用されているものである。

A 漁 具

立竿はFRPの16mを使用し、竿先糸200号を20m伸ばし「サルカン」をはさんで、道糸はナイロンテグス150号を135m伸ばし、その先にジャンボと称している堅い木製の抵抗体を取り付けて道糸を張る。枝糸は抵抗体前から30m、15m間隔でそれぞれ4本、合計5本の枝糸を“ツボ”でもってスナッチフックで取りはずしが出来るようにする。枝糸はナイロンテグス150号を抵抗体前から0.78m、1.14m、3.53m、4.25m、5.8mと伸ばし、枝糸の先に擬餌を5本仕掛ける。枝糸の長さは竿の長さ及び枝糸間、によって決定される。普通は抵抗体前から2本までの擬餌は曳航時に丁度波頭をたたくように枝糸を伸ばす、3本目の擬餌は波頭をさわる程度にし、4～5本目の擬餌は波頭より約1mほど高くなるように枝糸を調節する、また、抵抗体の後にSBL付スナッチフックでもって浮子(直径22cm)を付け、その後方の釣元はナイロンテグス150号を約15m伸ばし、その先に擬餌を仕掛けカジキなどの大物をねらう。抵抗体前の擬餌はトローリング用の夜光イカ(24cm)に10匁の鉛を入れて擬餌の振れを少なくする。抵抗体の後に仕掛ける擬餌はカグラと塩ビタコ(24cm)を使用する。

(イ) 一般構成図(図1-1)

(ロ) 漁具の仕様(表1-1)

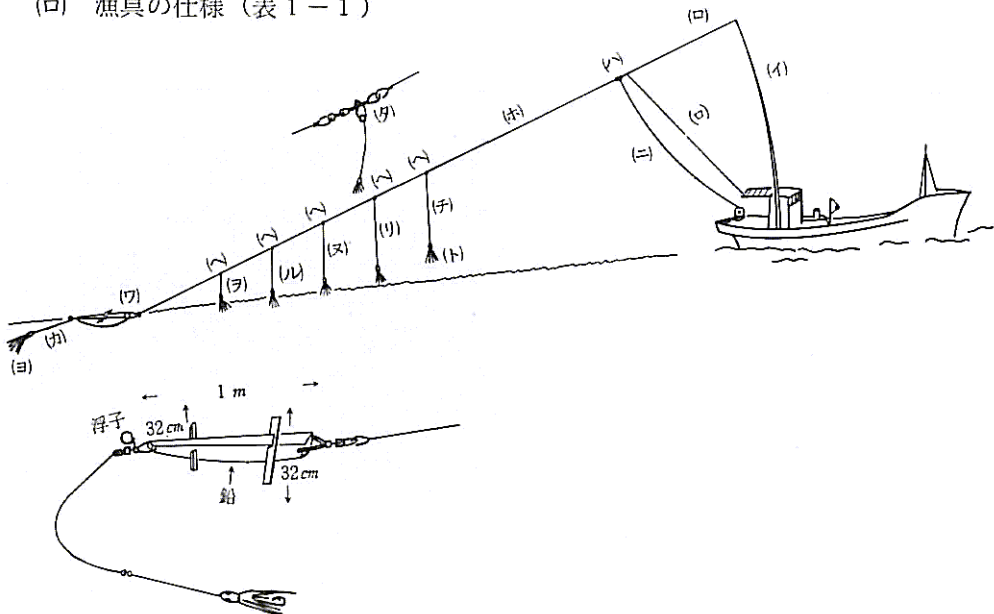


図1-1 漁具の一般構成図

表1-1 漁具の仕様

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	立竿	FRP	16m	1	
ロ	竿先糸	ナイロンテグス	200号 20m、18m	1	
ハ	とばせ	綿糸	12号、4丸、23cm	1	
ニ	とったり	ナイロンテグス	150号 20m	1	ニュークロ印
ホ	道糸	ナイロンテグス	150号45m、元縄300m	1	ニュークロ印
ヘ	サルカン	真ちゅう	SBLサルカン12%	5	
ト	擬餌	塩化ビニール	24cm 釣針40~45号	5	夜光イカ (サクラトローリ ングベイト)
チ	枝糸	ナイロンテグス	150号 5.8m	1	ニュークロ印
リ	〃	〃	〃 4.25m	1	枝間15m
ヌ	〃	〃	〃 3.53m	1	
ル	〃	〃	〃 1.14m	1	
ヲ	〃	〃	〃 0.78m	1	
ワ	ジャンボ ビコーキ	桐、杉(上質)	1m×7cm	1	鉛42cm×1cm
カ	枝糸	ナイロンテグス	150号 15m	1	ニュークロ印
ヨ	擬餌	プラスチック	目玉カグラ 11cm	1	
		塩化ビニール	タコ 24cm	1	1本ケンケン 2号~特大
タ	ツボ	ナイロン、ビニール			ビニールホースに テグス150号を シルバーDに通 しブレッサーで 止める

B 漁 法

(イ) 操業方法

明け方漁場に到着すると、船を走らせながら電動一本釣機にセットされた道糸の先のスナッチフックでもって抵抗体と連結し漁具を投下する。

船速は3~4ノットで曳航し、

魚がかかっても直ちに取込まず2~3本釣れるまで待つことが多く、船速を減速してとったりから道糸へと電動一本釣機巻き上げて魚を取り込み、再び曳航す



幹糸と枝糸の接合の仕方

る。なお、抵抗体の手前に魚がかかり、その前方にかかってない場合は、かかってない枝糸を道糸からはずし擬餌は舷縁に掛けてもつれないようにする。特にキハダ、メバチなどの20～30kg級になると強烈な引きで、縄が飛ばされたりするので危険である。漁船はラインホーラー、電動一本釣機及び無線電話（IW）、ロランA、カラー魚群探知機を装備した4.96トン船の39馬力で乗組員は1人である。

操業は早朝出港して夕方帰港する場合と1日沖泊して操業する場合がある。また、この漁業でカツオ、シビなどを漁獲し、生餌あるいは死餌でもってカジキ、マグロなどの一本曳も同時期に操業する。

(ロ) 漁期、漁場及び漁獲物

漁期は4月から10月、最盛期は7月である。漁場は距岸18～20マイル内に設置された5～6基の浮魚礁周辺が主な漁場である。漁獲物はキハダ、メバチ、カツオ、などが主でサワラ、シイラ、カジキなども釣獲する。主たる漁獲物であるキハダ、メバチなどは釣獲時にスポンジマットに乗せて脳ずいの上部分を切り、その穴にナイロン系の堅い“通称 マグロトル”を通して神経を殺し鰓と内臓を取り除き水氷で保蔵する。

(12) シルイカ（あおりいか）曳縄……………伊江漁業協同組合

この漁法は、昭和44年頃に伊江漁協において小型まき網漁業が導入された際に、集魚灯に白イカ（この地域で白イカと称す）の群れが見られたことからヒントを得て、福地豊治氏がこれまでリーフ内を漁場とした従来のイカ上曳漁具におもりを付けて曳航したところ、擬餌にアオリイカが喰い付いたことからこの漁業の始まりと伝えられている。

その後、漁具漁法の改良とともに漁場もリーフ外縁及び島嶼間の曾根へと漁場が拡大され漁獲量も増大した。

A 漁 具

幹糸の上部におもりを付けて海底近くを曳航する漁法である。船尾から出す道糸及び幹糸のステンレスワイヤ#32(1×7)を伸ばし、道糸の上部に枝糸ナイロンテグス20～25号を6m伸ばして餌木を仕掛ける。この下の幹糸約20mの間に5～6分鉄筋(1m)のおもりを付ける、サルカンをはさんで幹糸4.5mに枝糸ナイロンテグス20～25号を2.2m伸ばし、3～4本の枝糸を付けて餌木を仕掛ける。餌木材は軽くてやわらかで吸湿性が少ない桐を使用する、餌木の色は一般に背中部分は青色、腹部は白色、

また、背中部に赤系統色を塗って使用しているのもある、餌木は自家製でトビウオに似たこの地域独特の餌木である。

- (イ) 一般構成図 (図 1 - 1)
- (ロ) 漁具の仕様 (表 1 - 1)

A 漁 法

(イ) 操業方法

漁場は、水深20m前後から40mのリーフ外縁及び島嶼間の曾根で操業する。漁期は旧暦の8月15日を境に開始され、夜間操業で旧暦の7日～22日の月夜に操業する。曾根域漁場に着くと錨のついた浮標灯を投下して目印にし、それから漁具

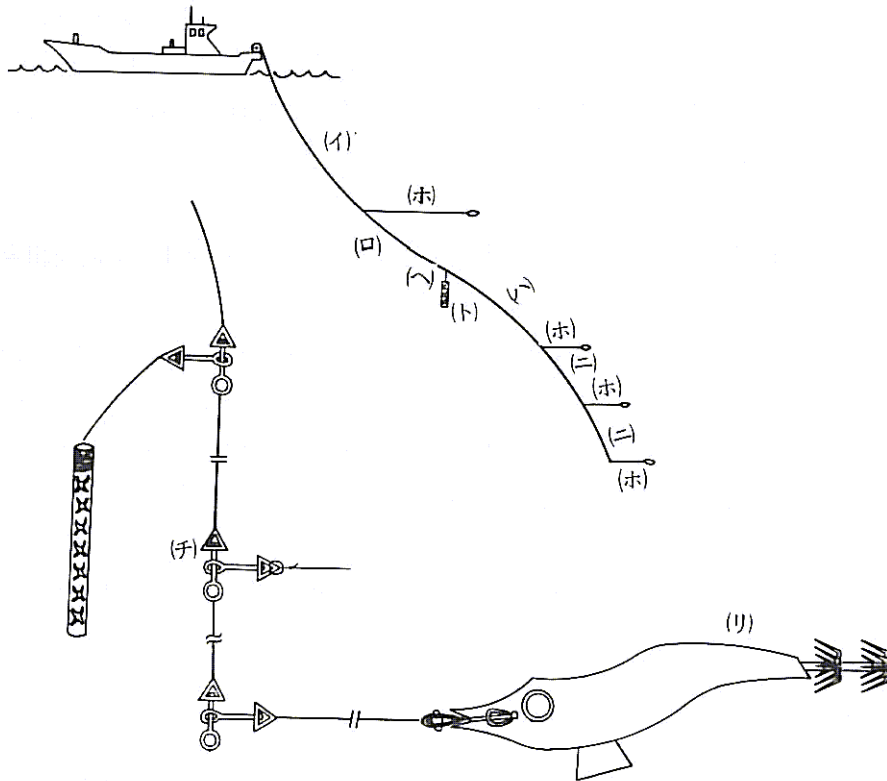


図 1 - 1 漁具の一般構成図

表 1-1 漁具の仕様

符号	名 称	材 質	規 格・寸 法	数 量	備 考
イ	道 糸	鋼	ワイヤー#32(1×7) 40m	1	
ロ	幹 糸	"	" 6 m	1	
ハ	"	"	" 13.5 m	1	
ニ	"	"	" 4.5 m	2	
ホ	枝 糸	ナイロンテグス	20～25号	3	ニュークロ印
		"	上部 6 m	1	
		"	下部 2.2 m		
ヘ	おもり用糸	ナイロンテグス	20号 3 m	1	
ト	おもり	鉄	鉄筋 5～6分 1 m	1	
チ	サルカン	真ちゅう	親子サルカン 8×10	5	
リ	餌 木	桐	トビウオ型 20～25 cm	4	

を投入してその周辺を曳航する。曳航速度は出来るだけ微速にする、漁具は船尾直下から約30度の角度で曳航する。イカが喰い付いたら速度はそのままで直ちに手繰り寄せて漁獲する。また、2～3尾喰い付いたときはゆっくり手繰り寄せて、取り込み、再び漁具を投下して曳航する。操業は月が出て沈む頃まで続けられるが、近い漁場だと朝方帰り、遠い漁場になると2～3日操業で帰港する。漁船はラインホーラー（一般に底延縄用）、魚群探知機を装備したFRP 4トン60馬力船で1人乗りである。

(ロ) 漁期、漁場及び漁獲物

漁期は10月～5月（旧暦9月～4月）、漁場は伊江島、伊是名島、伊平屋島、慶良間島周辺。漁獲物の白イカ（あおりいか）はビニール袋に包み氷蔵する。

(13) 赤イカ（あおりいか）曳縄 …………… 那覇市沿岸漁業協同組合

沖縄県の漁業者間ではアオリイカのことを白イカ、赤イカと別称しており、一般的には白イカはリーフの内側におり赤イカは外側にいて生息場所を異にしているようである。

アオリイカの釣り漁業は1本の餌木を表面近く曳いて操業するのが一般的であるが、こゝで紹介する漁法は、上層、中層、下層と立体的に3本曳く、いわゆる三層曳き漁法で漁獲成績は高く効率的である。

A 漁 具

図1-1のように3本曳でスマ曳縄と似ているが、道糸、幹糸の長さとおもりの重さで水深調節をしている。

船の中央から出す道糸(1)は、スーパート40号を27m伸ばしサルカンをはさんで幹糸はナイロンテグス50号10m、ナイロンテグス35号13mを伸ばしその中に鉄筋おもり(4分、長さ50cm)を付けて下層を曳くようにし、幹糸の先のほうに擬餌である餌木を2本仕掛ける。

船の右舷より出した竿の先端(2)のものは道糸スーパート40号を15m伸ばしサルカンをはさんで幹糸はナイロンテグス40号を15m、30号を13m伸ばし中間のサルカンにおもり(20匁)を付ける。餌木は2本付けて(1)より上層を曳く。

船の左舷より出した竿端(3)のものは道糸スーパート40号を10m伸ばしサルカンをはさんで幹糸はナイロンテグス30号を13m伸ばし2本の餌木を仕掛ける。曳く深さは(1)と(2)より上層となる。なお、(1)、(2)及び(3)ともに2本の餌木は幹糸から枝糸を出して仕立てる。

餌木は自家製で良質の桐材が使用され、型は個人の好みもあるがトビウオ型で体長15cm程度が好ましい。また、「カナ」と称している釣針は針12本2段針(釣針の長さは15mmで5mm曲げ10mm出し)は自家製か市販(8号)のものを使用する。餌木の色は一般に背は青で腹は白である。

(イ) 漁具の一般構成図(図1-1)

(ロ) 漁具の仕様(表1-1)

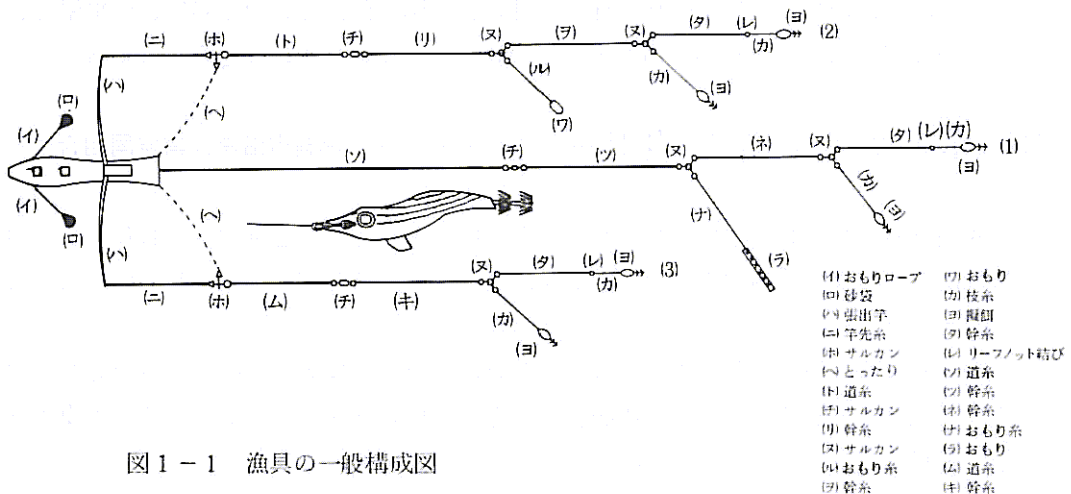


図1-1 漁具の一般構成図

表 1 - 1 漁具の仕様

符号	名 称	材 質	規 格 ・ 寸 法	数 量	備 考
イ	おもりロープ	クレモナ	4分、3 m	2	
ロ	砂 袋	ナイロン袋、砂	7 Kg	2	
ハ	張 出 竿	竹	長さ 6 m	2	
ニ	竿 先 糸	テトロン、ナイロン混	40号 6~7 m	2	スーパートト印
ホ	サルカン	真ちゅう	三股サルカン 5/0	2	
ヘ	と っ た り	テトロン、ナイロン混	40号 7~8 m	2	スーパートト印
ト	道 糸	〃	40号 15 m	1	
チ	サルカン	真ちゅう	ハコ型 5/0	3	
リ	幹 糸	ナイロンテグス	40号 15 m	1	
ヌ	サルカン	真ちゅう	三股サルカン 2号	5	
ル	お も り 糸	ナイロン糸	35 cm	1	
ヲ	幹 糸	ナイロンテグス	30号 13 m	1	
ワ	お も り	鉛	20~25匁	1	
カ	枝 糸	ナイロンテグス	20号 1 m	6	
ヨ	擬 餌	木(桐)	トビウオ型 15 cm	6	
タ	幹 糸	ナイロンテグス	25号 4.5 m	3	
レ	リーフノット 結び				
ソ	道 糸	テトロン、ナイロン混	40号 27 m	1	スーパートト印
ツ	幹 糸	ナイロンテグス	50号 10.5 m	1	
ネ	幹 糸	〃	35号 13 m	1	
ナ	お も り 糸	〃	15号 1.5 m	1	
ラ	お も り	鉄	鉄筋 4分 50 cm	1	
ム	道 糸	テトロン、ナイロン混	40号 10 m	1	スーパートト印
キ	幹 糸	ナイロンテグス	30号 13 m	1	

B 漁 法

(イ) 操業方法

漁場はリーフの外縁域で操業する場合もあるが、水深20~50 mの曾根での操業が漁獲量が多い。漁船は2トン未満のサバニが主体で乗組員は1人である。操業は夜間で、旧暦の8日~22日の月の夜に行う。時期は冬場であるので船の横揺れを防ぐために船首の両舷におもり(砂袋)をさけて航走する。曳航速度は出来るだ

け速度を落して船首を振らさないようにする。上層・中層曳はあまり気をつかわないが、下層を曳く(1)は、おもりの調節が重要で曳航時は常に道糸を握り海底に餌木がかからないように注意する。イカが喰い付いたら船を止めずゆるやかに施回しながら手操りで寄せて漁獲する。3つの漁具にイカが同時に喰い付いた場合は下層を先に取り込み、投入した後に他方の漁具を取り込む。

(ロ) 漁期、漁場および漁獲物

漁期は旧暦の8月15夜を境に翌年の5月頃まで続き、漁場は島嶼間に点在する水深20~50mの曾根及びリーフの外縁域で、夕方に出漁し明け方に帰港する。

漁獲物は氷蔵しない方がよいが、日帰り操業でない場合は、水けがないようにビニール袋3枚程度重ねてその中に漁獲物を入れ周囲から氷をかぶせて保蔵する。

(14) イカ (あおりいか) 曳縄 …………… 多良間村

多良間村におけるイカ曳縄は他の漁業より最も盛んで約20隻操業し、底魚釣漁業との兼業である。ここで紹介するのはその中の代表的なものである。

A 漁 具

図1-1のように2本曳であるが、漁具の道糸は一つになっている。船尾の両舷に長さ30~40cm程の綱かけ(ビット)を設置し、一つの道糸はこれにかけるようにする。漁具の長さは2本曳とも同じ長さにし、道糸はナイロンテグス40号を40~50m、これにサルカンをはさんで枝糸ナイロンテグス30号を10m、先に餌木を仕掛けてさらに枝糸ナイロンテグス30号を1.3m、その先に餌木を仕掛ける。餌木はすべて自家製で材質はくすの木か台湾桧を利用している。なお餌木の装飾材として市販されているウロコパール(ビニール)は、金か銀を付けて配色してある。

(イ) 一般構成図(図1-1) (ロ) 漁具の仕様(表1-1)

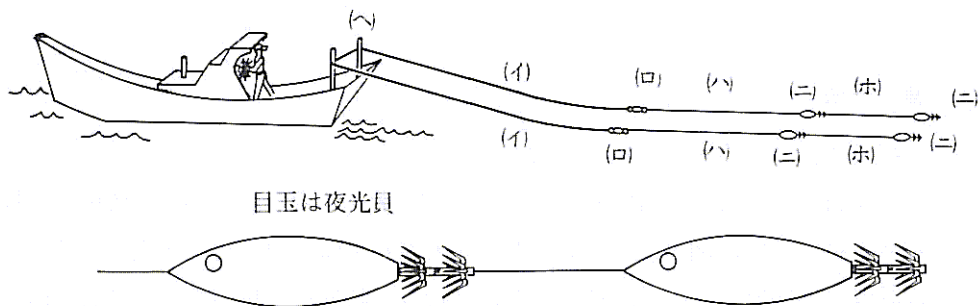


図1-1 漁具の一般構成図

表 1-1 漁具の仕様

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	道 糸	ナイロンテグス	40～50号、80～100m	1	色(金、銀のビニール)
ロ	サルカン	真ちゅう	タル型 5/0	2	
ハ	枝 糸	ナイロンテグス	30号 10m	2	
ニ	餌 木	くすの木、台湾桧	20～25cm	4	
ホ	枝 糸	ナイロンテグス	30号 1.3 m	2	
ヘ	網 かけ (ビット)	竹	30～40 cm	2	

B 漁 法

(イ) 操業方法

漁場はリーフの外側の赤イカと称すアオリイカを漁獲対象としている、操業は秋から初夏にかけて月夜に操業する。漁具は両舷の竹にかけながら投入し、曳航速度は出来るだけ半速か微速(2～4ノット)にして曳航する、イカが喰い付いたら船を止めずに手操り寄せて漁獲するが、釣獲の目安は、一方に喰い付くと道糸が引かれ、片方の道糸は引き寄せられる、いわゆる道糸の動きによって喰い付きがわかる。操業は夕方から明け方までで、月光時間帯に操業する。漁船は1トクラスの1人乗りが普通である。

(15) イカ(あおりいか) 曳縄 …………… 伊是名漁業協同組合

冬期から初夏にかけて本県沿岸域でイカ曳縄が盛んなように、伊是名漁協所属船でも比較的盛んで主として瀬魚釣り、モズク養殖等のかたわら行われている。ここに示すのも、瀬魚一本釣との兼業で操業しているものの紹介である。

A 漁 具

道糸は、スーパートト30～40号を30mの先に、サルカン、ナイロンテグス(40号)を使って5mごとに3個の餌木を仕掛けている。餌木はチャーギ(いぬまき)、シンダン(せんだん)、台湾桧などを使って自作し、色は青か赤のペンキを塗った

魚型である。

(イ) 一般構成図 (図 1-1)

(ロ) 漁具の仕様 (表 1-1)

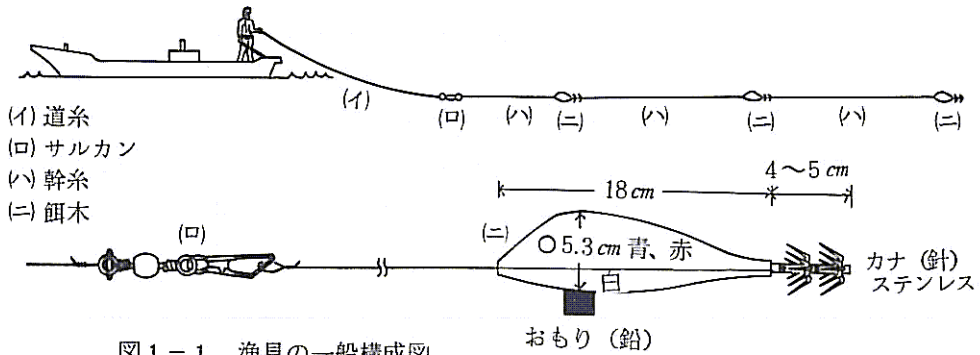


図 1-1 漁具の一般構成図

表 1-1 漁具の仕様

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	道糸	テトロン、ナイロン混	30~40号 30m	1	スーパーフト印
ロ	サルカン	真ちゅう	スナップ付サルカン5/0	1	
ハ	幹糸	ナイロンテグス	40号 5m	3	
ニ	餌木	木	22~23cm	3	

B 漁法

(イ) 操業方法

数本の餌木を道具箱に用意し、喰い付きの良い餌木をその日によって使い分ける。漁場は、リーフ外縁で行われる。漁期は冬から初夏までで、操業は月夜に行う。漁場に到着すると、船速は、餌木が水面下 0.5~1 m ならず沈むように曳航速力を調整する。道糸を手で軽く持ちながら曳航し、イカが喰い付いたら、船速はそのままで直ちにに取り込み、再び曳航する。漁船は 1 トンの FRP 船で乗組員は 1 人である。

漁期は旧暦の 11 月から 5 月までである。漁場は島周辺である。漁獲物の白イカ（あおりいか）は水蔵にする。

(16) アカジン (すじあら) 曳縄 …………… 糸満漁業協同組合

アカジン曳縄は糸満漁協が最も盛んで県内に相当普及もさせている。この漁法は海底地形を熟知し、その起伏度合に応じて曳く技術が要求される。なお、ここで示す漁法は、アカジン曳縄を専業として5年以上の操業経験者のものの紹介である。

A 漁 具

瀬魚であるアカジンを主として漁獲するので、瀬がかりによる切損を少なくするために道糸はステンレスの番線を使用する。

(イ) 一般構成図 (図1-1)

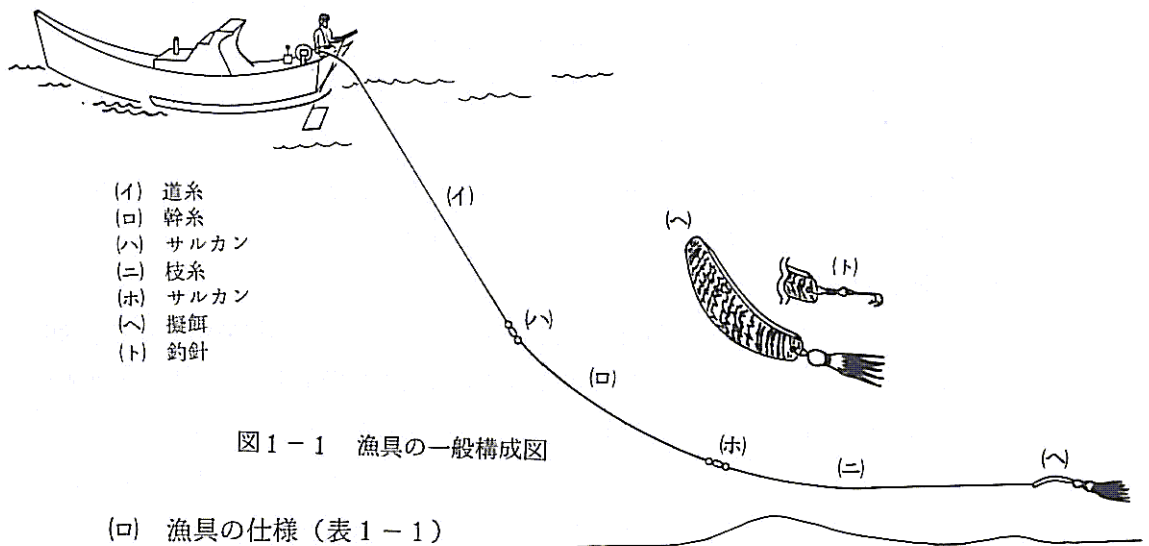


図1-1 漁具の一般構成図

(ロ) 漁具の仕様 (表1-1)

表1-1 漁具の仕様

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	道 糸	ステンレス番線	#20 1,000m	1	
ロ	幹 糸	ナイロンテグス	80号 7m	1	
ハ	サルカン	真ちゅう	タル型 1/0	1	
ニ	釣 元	ナイロンテグス	60号 7.8m	1	
ホ	サルカン	真ちゅう	タル型 1/5	1	
ヘ	擬 餌	ビニール プラスチック	タコ (20cm)、弓角 (11cm)	1	雲り、晴れで変る
ト	釣 針	鋼	2又針、1本針3号		

B 漁 法

(イ) 操業方法

餌はタコ（塩ビ）及びプラスチックの弓角の擬餌を使用する。また弓角の1本針にカツオの腹ゴウを三角に細長く切って付ける場合もある。

漁場に明け方到着すると魚群探知機で海底地形を確かめ半速で航走しながら漁具を投下する。道糸の長さは水深1mに対して約10mである。船速は約5ノットで曳航する。曳航時は操船しながら片手で道糸を握りあたりを待つ、電動1本釣機及びアクセルレバーは手の届く範囲に設置され、海底の起伏状況に応じて道糸を巻き揚げたり下げたりして擬餌が海底にかからないようにする。曳航時の擬餌は海底から4～5mほど浮くような状態で曳航する。魚が喰い付いたら船速をおとし、電動1本釣機で巻き上げて取り込み、再び曳航する。

魚は起伏のある海底のほうが釣獲率は高い、また中潮で海底から10mほど魚が上昇する場所などは最も釣獲率は高い。

擬餌は、晴れた日はピンク色の光たくのあるもの、曇り日はうす緑色の黒系統を使用する。漁船は2トン未満のサバニで、乗組員は1人である。

(ロ) 漁期、漁場及び漁獲物

漁期は周年操業である。11月～2月頃は魚は深いところへ移動するので水深60～100mで操業する。3月～10月頃は水深50m以浅で操業する。漁場は天然礁付近と人工魚礁付近である。漁獲物はアカジン（すじあら）、ウキムラー（かんぱち）、タマン（はまふえふき）、ガーラ（ひらあじ類）、オーマチ（おおちびき）等で、時々サーラ（さわら）も漁獲される。魚は氷蔵にする。

(17) アカジン（すじあら）曳縄 …………… 八重山漁業協同組合

A 漁 具

道糸は、ステンレス番線20番を100～150m、サルカンをはさんで釣元はナイロンテグス40号を6m伸ばし、その先に目玉カグラ付きタコ（ビニール）及び一本針を仕掛ける。カグラはうすいピンク色に青い斑点模様のものを使用する。

(イ) 一般構成図（図1-1）

(ロ) 漁具の仕様（表1-1）

B 漁 法

(イ) 操業方法

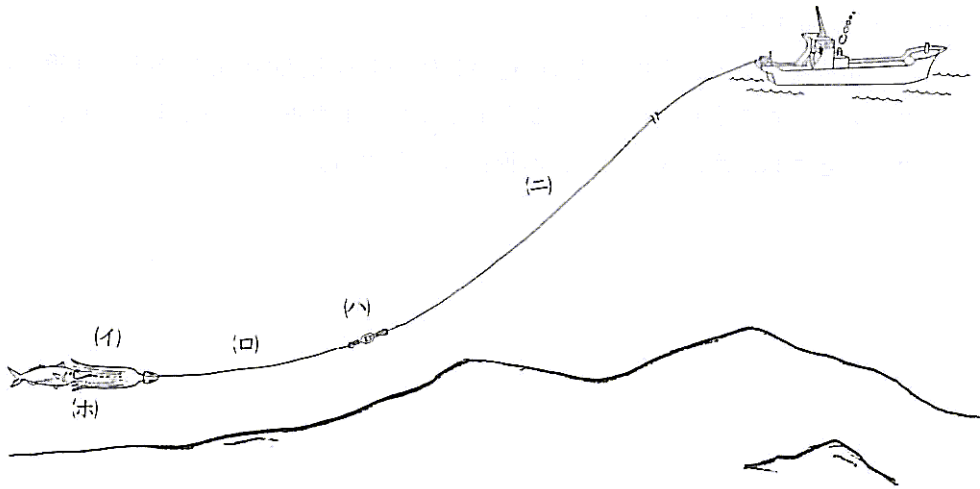


図 1-1 漁具の一般構成図

表 1-1 漁具の仕様

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
イ	擬餌 生餌	塩化ビニール	ビニールタコ 5.5~6寸	1	グルクン、ガチュン ミズン
ロ	釣元	ナイロンテグス	40号 6m	1	
ハ	サルカン	真ちゅう	ハコ型サルカン 4/0	1	番線
ニ	道系	ステンレス	#20 100~150m	1	
ホ	釣針	鋼	オーシャニッケル 10-0	1	

餌料は擬餌の釣針にグルクン（たかさご）、ガツン（めあじ）、ミズン（やまとみずん）などの魚をかける。餌料は生餌が最も効率的であるが確保に時間を費やすので鮮餌を使用する。明け方出漁し、漁場に到着すると、船速は約2ノットで曳航する。曳航時は道系を握りながらあたりを待つ。擬餌は岩礁地帯の海底から2~3mほど上層に保ちながら曳航する。魚が喰い付いたら道系を20mほど電動1本釣機に巻き上げて船速を止めながら巻き上げて取り込み、再び曳航する。操業場所の水深は夏は30mのところ、冬は深い場所に魚は移動するので水深約35~45mで操業する。漁場探索は山立てで行う。漁船はこの地域独特の“サンパン”と称するサバニと和船の折衷型船で、1トン級の20馬力に乗組員は1人である。

(ロ) 漁期、漁場及び漁獲物

周年操業である、漁場は島の周辺の起伏のある天然礁付近である。漁獲物はアカジン（すじあら）、ガーラ（ひらあじ類）、トカキン（いそまぐろ）、ウムナガー（きつねふえふき）等で、漁獲物は氷蔵する。

テグスの結び方

図1-1 底延縄などの幹縄（トワイン）へ枝テグス等の結び方

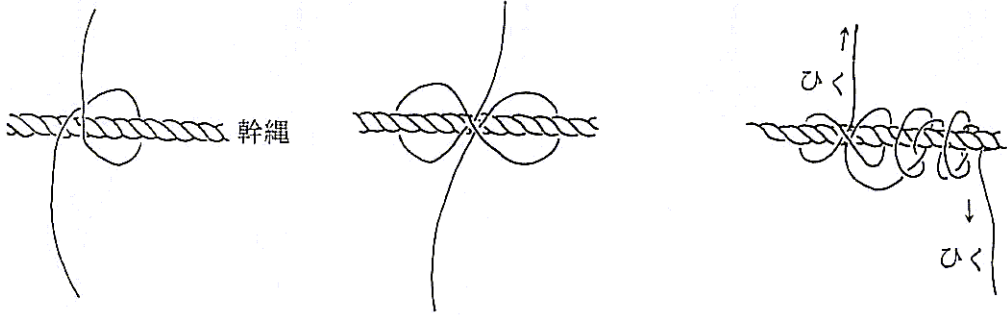


図1-2 テグスのつなぎ方

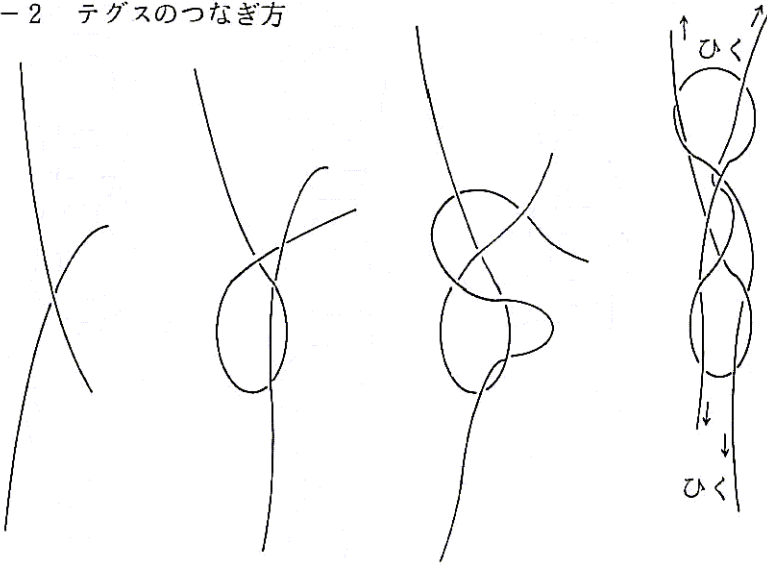


図1-3 つぼ結び

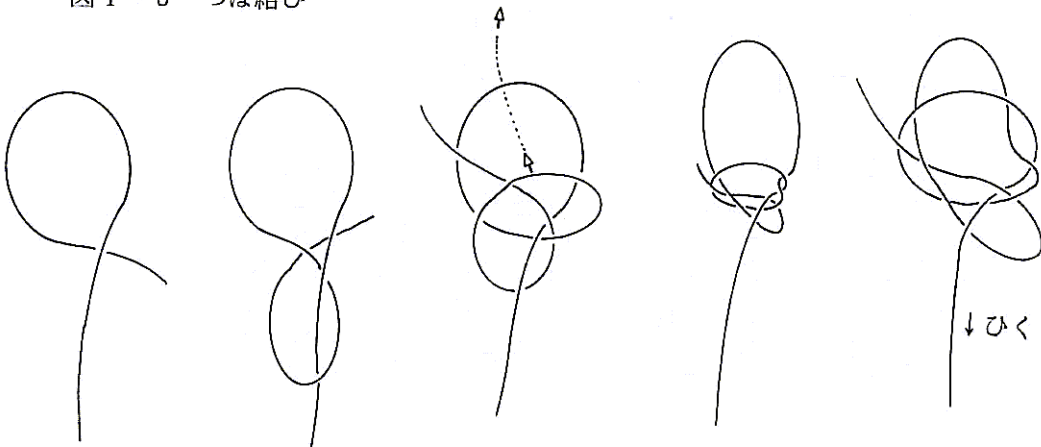


図1-4 サルカンの結び方

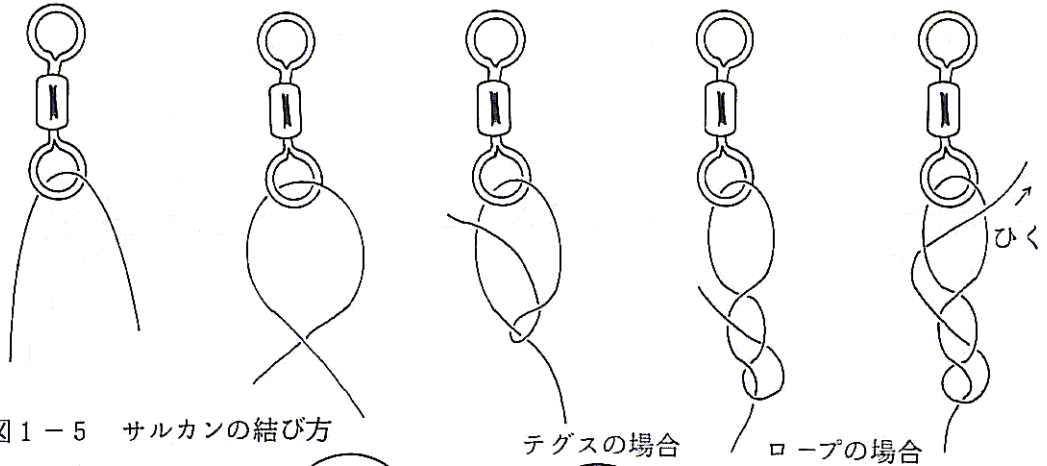


図1-5 サルカンの結び方

テグスの場合

ロープの場合

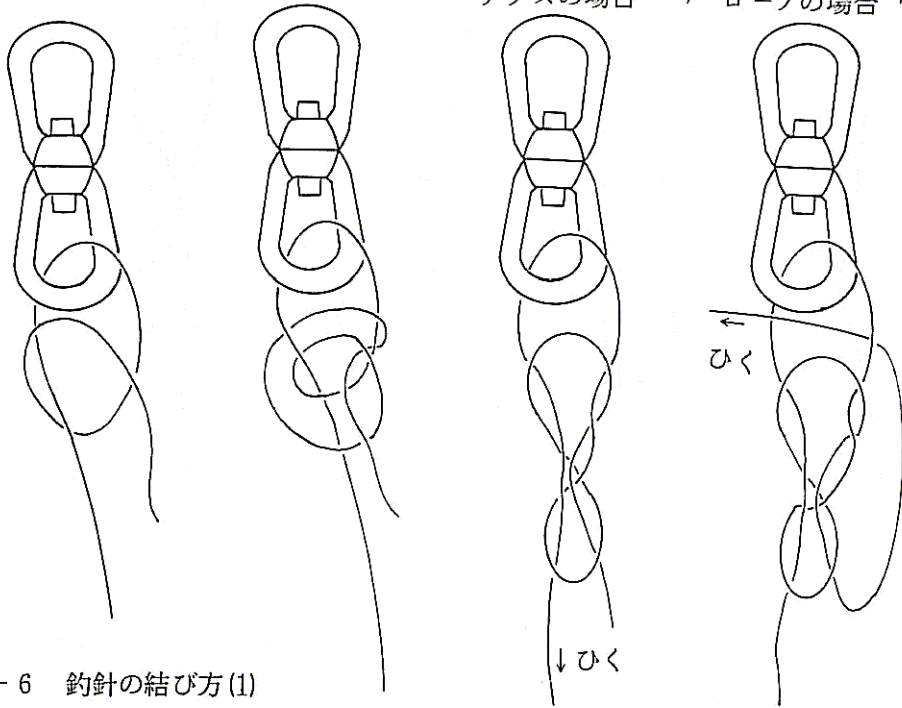


図1-6 釣針の結び方(1)

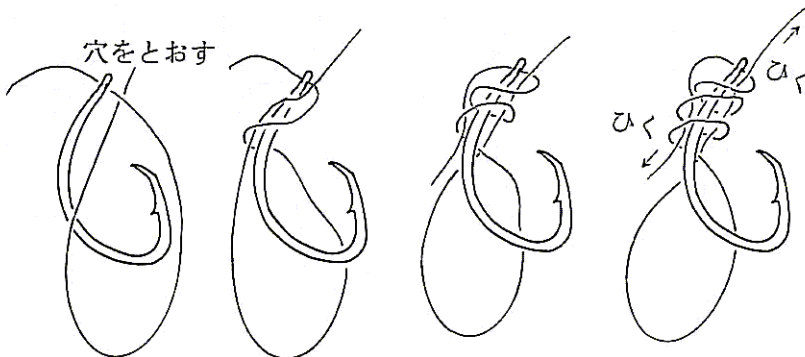


図 1-7 釣針の結び方 (2)

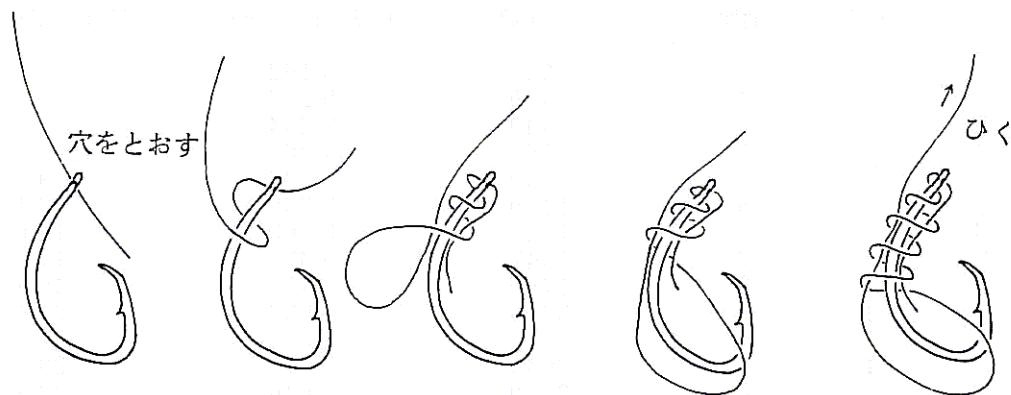


図 1-8 釣針の結び方 (3)

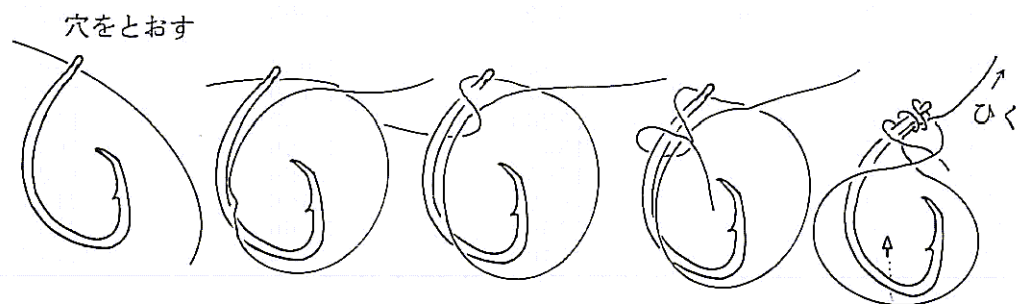
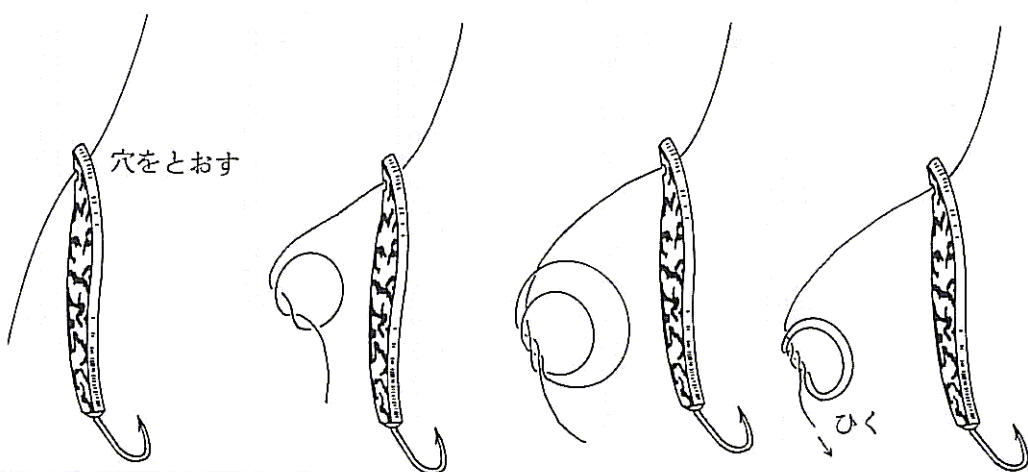


図 1-9 サワラ用擬餌 (角面) の玉結びによる固定



ナイロンテグスの標準規格

号	厘分	柄厘	デニール数	標準直径 (mm)	重量 ρ / 100 m
1		1	220	0.162	
1.5		1.5	330	0.202	
2		2	440	0.234	
3		3	660	0.284	
4		4	880	0.329	9.7
5		5	1100	0.368	12.1
6		6	1320	0.403	14.6
7		7	1540	0.435	17.0
8		8	1760	0.472	19.9
10	1	0	2200	0.522	24.4
12	1	2	2640	0.571	29.3
14	1	4	3080	0.616	33.9
16	1	6	3520	0.656	38.5
18	1	8	3960	0.698	43.6
20	2	0	4400	0.736	48.5
22	2	2	4880	0.772	52.2
24	2	4	5280	0.806	58.1
26	2	6	5720	0.840	63.0
28	2	8	6160	0.871	68.0
30	3	0	6600	0.903	72.5
40	4		8800	1.054	98.3
50	5		11000	1.169	122.5
60	6		13200	1.280	146.6
70	7		15400	1.350	163.1
80	8		17600	1.450	188.1
90	9		19800	1.566	219.5
100	10		23000	1.666	248.4
120	12		26400	1.750	274.1

鋼線 (ワイヤー) の規格

単位: mm

線番	線径	線番	線径	線番	線径
# 1	7.62 mm	# 19	1.02	# 37	0.17
2	7.00	20	0.91	38	0.15
3	6.40	21	0.81	39	0.13
4	5.89	22	0.71	40	0.12
5	5.38	23	0.61	41	0.11
6	4.88	24	0.56	42	0.10
7	4.47	25	0.51	43	0.09
8	4.06	26	0.46	44	0.08
9	3.66	27	0.42	45	0.07
10	3.25	28	0.38	46	0.06
11	2.95	29	0.35	47	0.051
12	2.64	30	0.32	48	0.041
13	2.34	31	0.29	49	0.031
14	2.03	32	0.27	50	0.025
15	1.83	33	0.25		
16	1.63	34	0.23		
17	1.42	35	0.21		
18	1.22	36	0.19		

JISハンドブック鉄鋼編、SWGワイヤゲージより